
RPGヒロインという名のチート野郎。

菜智

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RPGヒロインという名のチート野郎。

【Zコード】

Z5849Y

【作者名】

菜智

【あらすじ】

大人気RPGから飛び出してきたのは9割シンの1割デレなチート過ぎるヒロイン。おまけに、飛び出てきた先には立派な二ート。その二ートとチートヒロインがまさかの居候というベタな展開へ発展!?

二ート
主人公「…あー。頭いてえ。」

ヒロイン「風邪か?」
主人公
ちげえし…

対処1・まず、自己紹介。んで、居候。

「神とのゲーム。～それは気まぐれ？～」

そのゲームは何処の会社の誰が作ったのかも分からない、まったくもって謎の多い人気RPGゲーム。

だが、その劇中に登場する主人公のヒロインが余りにもヲタクの心を驚きにし、古い機種でありながら絶大なヲタク支持を受けている。

そのゲームを、例に漏れることなくしているのが俺、上南集カミヤシユウである。だが、ゲームをしていると後ろから、自分しかいない部屋の、自分の背後から。

『ほう。私はこうして動いているのか。中々、面白い。』

思いつ切り大人びた声がするものだから、後ろを恐る恐る振り返つてみれば

『ん?どうした。私に構わずゲームを進めてくれ。私もこのように見るのは初めてでな。』

見た目そのまんま、今、俺がしているゲームの大気ヒロインがいた。

「……」

取り敢えず、後ろの「誰か」は無視してゲームを進めていく。が

『ほうほう。』

だとか

『このダンジョンはこうなつていいのか…。いやはや、興味深い。』とかずつと言わていれば気にならない筈はなく。俺は一回セーブをすると、メニュー画面にして再度後ろを向いた。「誰か」はいつの間にか我がもの顔で俺の後ろにあるベッドで寝いでいた。

『あ!何故止めた!?私は見たいと言つこ……。』

「ちょっと待て。」

見るからに、ザ・ファンタジーな服に寄つたシワを伸ばしていく
誰かへを見ていると

『全く…。どうしてこうシワが出来るのか…』

いや、普通ですから。それ。

『おい、お前。早くゲームを開ける。私は見たいんだ。』

この大人気RPGヒロインを支持しているラタクからしたら、きっとこの性格は……どうなのだろう。

「あの、さ。貴方は、誰ですか？」

『私が？私はお前のしているゲームのヒロイン。名前は、ナツメ。』

俺は心の中で盛大に溜息を付く。もちろん、表には出さないが。「で、そのゲームのヒロイン様が何故俺の、一プレイヤーである俺の所にいるんですか？」

『さあ。それは私の預かり知る事柄ではない。』

いやいや、そんな事をどや顔で言われても。どうじろと？

『ここに出てきたのは、私自身の意思では無いからな。』

「じゃあ、誰の意思？」

『……え、と。』

自称ヒロイン・ナツメは少しょんぼりとしたような、少し言ひづらいような顔をした。

『……ゲームの、ボス。』

そんな顔を急に赤らめて、ぼそぼそと言われて、ときめかない男などいないはずはなく。

「……はあ。」

だが、そんな現実からぶつ飛んだ事を受け入れる脳など生憎、俺には備わっていなかつた。

『ごほん。……とにかく、だ。これから暫くの間、ここでは話にならぬ。』

「……は？」

俺はナツメの言葉を聞き返した。今、なんて言つた。

「あのや。ゲームの中に戻ってくれますか？」

『無理だ。戻れる場所はゲームの何処かのダンジョンらしいからな

「…つまり、そのダンジョンを見つけないと戻れない」と?

あー。頭痛い。遂に、自宅警備員丸三年の俺にも幻覚が……。

『と、いう訳で。これからよろしくお願ひします。な?』

につこりと笑うナツメの顔が若干怖く見えた。その笑顔の後ろに俺は武器を構える悪魔を見た。多分。

…これは、面倒見なきゃいけないんだろうな…。

これから起ころるであろう様々な問題（大体は友達が関係するが）頭が回りそうだ。

…取り敢えず、俺はこのナツメとやらをゲームの中に戻す為にゲームを開いた。

…後ろを気にしないように。

対処2・チートは現実でもチートwww

前回までの振り返り。

大人気RPGから飛び出して来たヒロイン様はかなりのツンが多いヒロインでした。おまけに、ちょっとの天然。
そんなツンツン^{チートヒロイン}テレ少女と一^{じつぱな}プレイヤーの自宅警備員丸三年の居候物語。

ナツメのちょっと機械じみた声にも慣れ、サクサクとまではいかないがそれなりにゲームを進めていた頃。（暗くてそれ以上は見えない）だろう。

俺の胃が空腹の抗議の声を上げた。時間を見れば、大体3時ぐらいそろそろゲームへの集中力も切れてきたため、俺は冷蔵庫から晩ご飯の残りを取り出すと後ろで眠っているナツメを起こさないようご飯を食べた。意外と減っていたのか、胃がもつともつと食べ物を求めてくる。

気づけば残り物はなくなつていてが胃はまだ足りないと言わんばかりに抗議の音を鳴らし続ける。

ぐう。

うん。腹減つてゐなあ、俺の胃よ。まだ足りていひんだろ？分かつてゐるさ

ぐう。

だが、それは鳴りすぎだろ？

ぐるううう。

自分の腹の音ではない音が俺の後ろで鳴る。さあ、落ち着こい。そして、振り向くんだ。

振り向けば寝惚け眼のナツメが恨めしそうにこちらを見ているではないか。

「……狡い。」

「…は？」

「『』飯……狡い。私はまだ食べていないと。」

ああ、あの時にバツチリ起きてて見ていたと。取り敢えず俺はナツメの機嫌をこれ以上損ねない為に、冷蔵庫に行つて何か食べる物を探したが……生憎と無かつた。

「……無い、のか？」

「ああ、さつぱり全くぐだ。明日になればネットで頼んでいたのが届くから明日まで我慢し」

「じゃあ、外に買いに行くぞ。」

…は？今、自宅警備員にとつての禁句が出てきたが。

「下には、コンビニエンスストア、があるのでうへ、

「買いに行け、と？」

「そこまで私は鬼畜ではない。私もついて行つてやる。」

あくまでも傲慢ソソの態度は崩さない。ここまでいふともう清々しい。

だが、ここで折れてしまつては自宅警備員の名折れ。俺は若干強く。

「俺は外へは出ない。行きたいなら場所を教えるから行つてくれれば？」

「…我を通すつもりか。私に対し。…いい度胸だ」

ナツメは口を手で押さえて小さく、くつくつく、と笑つた。そして、いつもの傲慢な微笑みで。

「なら、私が連れ出してやる。お前の意思とは関係なく、な。」

「何言つて」

ナツメは俺の言葉を無視して。

「迅風」

その言葉が聞こえてからほんの一瞬だけ、目の前が真っ暗になりナツメの声だけが聞こえてくる。

「どうだ？私の魔法は」

目を開ければそこにはよく見知つているコンビニ「時11時^」があつた。

「……は？」

「私が魔法を使ってここまでワープ、転移してきた」「魔法って……!?」ここは現実世界だろ！」

そう反論した俺にナツメは特に悪びれる事もなくさらりと。「私には現実も何もない。私にはただ、魔法を使えるという事実があるだけだ。」

そんな言葉に俺は言い返す気力もなく、ただ頑垂れた。

こうして、俺の自宅警備員生活は三年という短い期間で終わっちゃつた。

対処2・チートは現実でもチートｗｗ（後書き）

はじめまして！今日はちょっと嗜好を変えて「omeletteほいお話です（＼＼＼＼＼）

ゲームのチートヒロインが暴れまくりますwでも、ちょっとシリアルス投入してみたりw

ちなみに。私は最近（ちょっと前かな？）シリーズ15周年を迎えた某シリーズが大好きです。7.5さんのね（＼＼＼＊＊）

対処3・ゲームの戦いは現実では結構なハードwww

前回までのあらすじ。

ツン…もとい、傲慢^{オーラ}テレなヒロイン様の現実丸無視の魔法によつて俺の自宅警備員生活は呆氣なく終わつてしまつた。：なんだかなあ。

コンビニへ7時11時[♪]である程度の「」飯（勿論ナツメの分も込みで）をどつさりと買い込む。

その中には「」飯[♪]なのか食玩やら期間限定のお菓子やらも入つてゐる。財布が悲しい…。

「早く帰るぞ。」

そんな俺の気も知らずに、ナツメは幼い子供のよつて口^コと微笑む。口調は何ら変わつていなが。

「…はあ。はいはい。了解しましたと。」

俺はどうさりと入つたビニール袋を持ち上げると、ナツメが怪訝な顔で辺りを見回してゐる。

「どした…？早く帰るんぢや「静かに」

ナツメは何時もとは違う声で俺の言葉を遮つた。その口ならない雰囲気に俺は黙り込むしかなかつた。

「…先に帰つていろ。私の分は取るんぢやないぞ？取つたら、分かつていいよな…ん？」

ナツメは俺にそう言つと、足早に帰る方向とは逆の…俺が子供の頃によく行つていた公園へと走つていつた。

俺は何かを感じつつも、ナツメのあの雰囲気を再び思い出してそのまま帰路を歩き始めた。

集が完全に去つた事を確認して、ナツメは公園に続く並木道の木々に語りかける。

「さて、どうした…。私に何か言伝たい事柄でも？」

『いいえ。単に私が興味を持つだけですよ。ゲームでしか存在しない架空の者が生きている様子に。』

並木の木々から響くような声が反響してナツメの耳に届く。
「姿は見せてくれないのか？私はしつかりと相手を見ないと話せない性格なのでな。」

ナツメは楽しいかのように微笑んだ。その笑みは酷く美しく、妖艶。
『貴方の頼みは断れませんからねえ……。くあの方へからの命令もありますが』

木々が風も吹いていないのにざわざわと靡き始める。空は清々しい
ほどの黒と青の相まつた見事な景色だが、それとは反対に空気は緊張していた。

「腕試し、というものか？…いいぞ。来いよ」

靡いていた木々の木の葉が散り、一斉にナツメ目掛けて飛来する。
だが、ナツメはそれに何の興味も示さない。

ただ、先のように妖艶な笑みで。

「…水槍」

ナツメに飛来していた木の葉…刃ほどの強度まで強化されていた木の葉が宙でピタリ、と動きを止めた。

ナツメの後ろに仁王立ちするのは水で創られた龍。そしてその頭上で次々に展開されていく同じく水で創られた流星群。木の葉は水に圧倒され、次第に数を減らしていく。

『……ははっ……』

唐突に、声が笑った。その笑いに同調するように木の葉は数を増やして、ナツメに襲いかかってくる。

ナツメはまた水龍に命じて、木の葉を水の流星群で打ち消していく。
と、ナツメはある事に気が付いた。何枚かの木の葉がナツメの後ろ、
そして、水龍の後ろを通り抜けていく。

先の声が発した唐突の笑い声と、今の木の葉の動きから推測される
答えはたつた一つ。

(後ろに私が動搖するものがある。……つ――)

ナツメは後ろを向かずに、直ぐ様もつ一つの魔法を作動させる。

「つ影身！」

ナツメの影を借りて創られたもう一人の「ナツメ」は本体であるナツメの意思を受けて、直ぐ様後ろへと瞬間で移動すると「ナツメが動搖するもの」を木の葉の刃から守るためにナツメの力を受けて魔法を発動する。

「護花」

影の「ナツメ」と「ナツメが動搖するもの」に覆いかぶさるよう、大きな睡蓮の花が現れる。

「全く。私は帰つていろと、言つていたはずだが」

ナツメの口調はしつかりと怒つていた。しかし、その表情は驚く程に穏やかに微笑んでいた。

「……ははっ。まあ、ヒロインが戦うのを見るのも悪くないかな。」

その表情に少しば驚きながら、集は言い返した。ナツメは小さく、誰にも聞こえない声で

「馬鹿。」

対処3 ゲームの戦いは現実では結構なハードww(後書き)

： 戦闘シーン楽しかつたです。多分一番早いペースで戦闘シーンは書いていたと思いますww

対処4・チート戦闘終了のお知らせ。

前回までのあらすじ。

取り敢えず、ゲームの戦闘が現実世界でも起こっている…としか、言えない。

「さて、ど。もうこれで終わりか?」

ナツメの勝ち誇る顔が集の脳裏に浮かび上がる。

『……ヒメギ秘欺。』

声の響きが薄れしていくと共に、木の葉はただの葉っぱとして地に落ちていく。代わりに、並木から姿を現したのはゆらゆらと陽炎のように揺らいでいる影。しかし、それはしつかりと歩みをナツメに進めていく。

「バツクアップシステム、作動。リンク、オールグリーン。」

影の「ナツメ」も後ろの集を護りの花“護花”ケンカに包み込ませたまま、ナツメの隣りに寄り添うように立ち、言葉を一人で紡ぐ。

それが集にはゲームで一度だけ見たことのある技に見えた。

『……言の葉の紡ぎし、彼方に消えた夢幻よ。ここに。』

二人の間からちらちらと溢れていく光の欠片が次第に大きな鳳凰を創り。

『其方は我と共に、照らす光と在れ。』

形作られていく鳳凰は大きく翼を広げ。舞い踊る光の欠片は桜の花弁を模していく。

『……ブライティング誉の翼』

鳳凰の清く滑らかな咆哮が周囲に優しく響きわたる。

「お前の技：秘欺は、一度に己の分身を大量に発生させる。そして、一體ずつで倒しても直ぐに分身はまた現れる。…私の影身の量産系か？」

桜の花弁となつた光は先の木の葉のように鋭い刃のような特性を持

つ。

「でも、一度に倒してしまえば何の問題にもならない。」

「ふあ、や……やあああああああ……」

光の刃が鳳凰の羽の羽撃きによつて、刃となつた花弁は次々に影を撃ち抜き数を減らしていく。

だが、その中でナツメは小さな違ひ…異変に気付いた。

撃ち抜かれていく影の残滓が次第に一つの影に集まつていく事に。その影は大勢の影よりもかなり後ろの方…まるで指揮官であるかのように立つていた。

(つまり、あれが本体…!)

ナツメは、鳳凰の動きを止めるとその影へと微笑んだ。

「全く出てこないからいつもの影かと思つていたが…そうではなかつたな。」

影は口を二やり、と歪ませて

『流石は“神力”^{チート}の名を冠するだけあつて見破られましたか…いやはや残念。』

影の漆黒の黒が糸のように解けていく。その後、現れたのは白髪を腰にまで靡かせている中性的な顔立ち、体をした、しかし男性。「久しいな。いや、ゲームでは一回のイベント戦闘でしか会つてはいなかアサギ・リヴェリアス^{ウシツ}』

『確かに。しかも私は影を通してでしか見ていませんものねえ。ナツメ・イウエ・リストイアート。』

二人は和やかな微笑みで…互いに火花を散らして。

「で。お前が来たということは何かは預かつてているのだろう?でなければ、お前が興味本位でこんな所に来る筈がない。あいつは何で?」

男性…アサギは先の微笑みから一転、表情が一変した。何も感じない無表情へと。

『後、三日。それまでに、全てを断ち切るか…自らく縛^ハを壊してくるか。』

ナツメの顔に亀裂がはしる。だが、アサギはそのまま静かに礼をす
ると霧のように霧散して消えた。

“護花”が消えて集はナツメの所へと向かつて、その表情を見て驚
いた。

「……あ。どうした？」

ナツメの表情は何かを恐れているような、それでもそれは直ぐにいつもの傲慢な微笑みに戻っていた。

「何を言われたんだ？」

「知りたいか？」

ナツメは自分の影身ウツシミを戻すと少し迷つてから。

「ゲームの中に戻れる方法がある、と…」

「良かったな！」

集の余りにも嬉しそうな反応にナツメは少し（いやかなり）ムツとした顔で、尚且つ明白に機嫌悪い声で。

「嬉しそうだなあ…。まあ、いい。帰るぞ。」

わざわざ歩くナツメに集は慌てて追いかけた。

結論

チートキャラ同士の戦闘は見る分は楽しいが、巻き込まれると結構

…見返えはあるが同時に生命の危険もある。爆風とかばないw

対処5・チートの「機嫌ナナメ」

あれから…現実世界で起こったチート同士の戦いの後から、ナツメの様子がどうもおかしかった。

いつも何処か上の空で、俺を見て溜息をついたり…今までに無かつた事が。

「ナツメ。お前、どうしたんだ？あの戦いの後から様子が変だぞ。」

「ああ。気にするな…別にお前に何か迷惑をかけるでもなし、これは私個人の問題だから、な」

そう言つてまた上の空。いうなつてしまつてはいつちの調子も狂つてしまふ訳で。

まあ、当然、ゲームも進められない。

「お前、何悩んでるんだよ。ゲームの中に戻れるんだろ？」

緩々とナツメは首をこっちに向けた。よく見れば目の下にまづつすらと隈が出来ていて。

「…そんなに私が帰る事が嬉しいのか。」

「え？そりゃあ…だつてお前の生まれた場所だろ？帰りたいとは思わないのか？」

「…生まれた場所…か。」

ナツメは自嘲するような微笑みを浮かべて、それをまた直ぐに消した。そんな表情を見たことが無いから俺は何か問題でもあるのか、と思ってそれ以上は聞かなかつた。

…聞くことが出来なかつた。

「さて、少し消える。結構居なくなると思うが…気にするな。」

ナツメは何も考えていないかのような顔で俺にそう言つ。

「…もし、私が本当に消去たら、どうする？」^{きえ}

そんな質問が唐突にナツメから聞こえた。俺は直ぐに答える事が出来ず、考えている間にナツメは光となつて消えてしまつた。多分、あの魔法…迅風ショウブウを使ったのだろう…僅かなそよ風が部屋を駆けて消

えた。

一陣の風が何処かの病院の何処かの病室にそよ風として舞う。風の後にはナツメが立っていた。

ナツメの視線の先にはベットに横たわり、眠っている少女。触れてしまえば脆く崩れてしまいそうなほど儚く見える少女は辛うじて生きている。聞こえない程の寝息で。

「……このままだったら、良かった…？」

一人、ぼつり、と呟いても応えてくれる人は誰もない。

「分かんないよね。うん…分かつてる。だつて」

白すぎる病室に新たな風が舞い踊る。ナツメは少女の頬にそっと触れた。

肌色も見えない程の肌の色。生きているのかも分からない冷たさ。

まるで、それは人形。

「…今まで続くのかな」

“ 今まで？私が飽きるまで。 ”

何処からか響く声はアサギのような中生的な声ではなく、しつかりとした意思を持ったしかし何処か気の抜けた声。

“ いやいや。全く予想外だな。君の性格ならさつさと言つていろと思つていたのに。残念”

「お前…いつからここだと分かった？ここが私の…」

“ さあ？でも僕にどうてはそんな事はどうでもいいんだ。 ”

“ 君という玩具おもちゃが中々帰つてこないからさあ、僕、暇人なんだよね”

「知らないな。お前の都合なんて」

“んー。でもここでの君も結構面白いからさあ……。もう少し鑑賞させてもらひつかな？”

「……はっ。私を野放こしておくれとまな。面白い」

声はくすぐすと、子供のように笑った。

“後一日。それだけ経つたら僕は君とお君の近くに居る人へとびきりの贈り物をしてあげる。”

「……消える。」

“うふ。そろそろ戻らなくつけないからねえ。それじゃあねえ”

声は耳に響くままに消える。残されたのはまた静寂。

「…私は」

咳きに応えてくれる者も、いない。

対処5・5・ゲーム話（前書き）

今回は本編ではありません。ちょっとした息抜き用の話ですので気楽に見てもいいえれば良いと思います。中身はギャグっぽい（？）です

対処5・5・ゲーム話。

「さて、今回はいつもの話とは違つて……ちよつとした息抜きで読んでもらえると私は嬉しい限りだ。」

「あのわ…ナツメ。せめて何をするのか位は喋れって。あー、えと…すみません」

集がペコペコと頭を下げる。

「今回は私がヒロインを務める大人気RPGゲームのあらすじを紹介しようと思つていい。」

「大人気つて自分で言うか普通…」

「何か言つたか？ん？」

ナツメの極上の微笑みは実はかなり怒つている証拠だつたりww
「はあ…さて、それじゃあ紹介しますか。余り文字数ももらつていないうからな」
「文字数など関係ない。いざとなつたら私が作者に攻撃魔法をぶつぱなしッ（「」）

暗転（只今、集が必死にナツメを説得しています。暫しお待ちください。）

「…それでは、あらすじをじ覽下さい。」

静かな音がいつも世界中に奏でられる世界・オリシア。その奏でられる清らかな音が消えた時、世界に光では決して照らされる事の無い漆黒の闇に包まれていく……。

その時、誰かが願つた。否、誰かではない。世界中の皆が願つた。

「どうか、この救われぬ漆黒の闇をも照らす優しく、清らかな真光
を…。」

その願いが誰に届いたのか、それは誰にも分からない。そして、願いは成就された。

世界の何処か、誰も知らない、世界すらも知らない、近くで遠い場所で生まれ落ちた存在を誰からも祝福されず、神にも見離された清らかな真光^{ヒカリ}。

その名は、ナツメ。幻の透き通る桜に誘われた者。人々の数え切れない程の願いを、己に生まれてから身に封じられた記憶と過去を背負って。

そして、たどり着く。闇の主へと…自分と同じく誰からも祝福されなかつた者へ、ナツメは問う。

「ねえ…」

（ナツメがあらすじをしっかりと見るとナツメがナツメっぽくないなあ…。何というか）

「ナツメしてあらすじをしつかりと見るとナツメがナツメっぽくないなあ…。とか思つていらないだろ?」

「……（・ゝ・）」

「よし、お前。そこから逃げるなよ?」

ナツメが何故かメリケンサック装備で近付いてくる。こうなれば、手段は一つ。

「……俺、生命は大事にする奴だから…」 = = バ(：。)

／

集は逃げた!しかしナツメに囮まれた…!

「ふ、ふふふ。逃げられると思つなよ…？」

暗転

「それでは、また本編で会おう。」

「ま、また本編で頑張りま s (r y
がくり、と集の頭が落ちた。

対処6・新たな波乱はやはりアイツが持ってきたw

「んう……ふう。」「

「ひりり、と俺のベッドでナツメが寝返りを打つ。只今、朝の6時を過ぎたところです。

先に言つておいた。俺は変態ではないといつ事を。

「……は、ん。」

確かにナツメの寝顔はしっかりと見てはいるが、それは不可抗力の結果であつて…。えつと、今の俺の姿勢は…、ナツメに腕を掴まれて（もんのすごい力で）ベッドにダイブ。離れようにも力が強すぎて離れられないといつ

（何の漫画だよ…。このベタベタな展開は）

「……ん。」

また、ひりり、と寝返りを打つた瞬間俺の心臓は許容範囲を軽く超えた。ナツメの顔が、とにかく近い。

互いの寝息がかかる程に顔が迫ってきている。おまけに、ナツメのいつもより緩んだ顔もかなりのレアな訳で。そんなチャンスの時に離れるなどという愚かしい事をする事など言語道断。
ばくばく、と鳴り響いて仕方がない心臓を無視して俺はその姿勢を維持し続けた。

……後にこの行為が仇になるとは分からずだった。

「……信じられない。お前、一回マジで死ぬか？」

「だから、ごめんて。」

その後、起きたナツメにこてんぱにされたのち…ゲームを再開した。もちろん、盛大なビンタORキックを見舞われた訳だけれど。ビンタの痛みが中々引いていかないなか、唐突にインターホンが鳴る。
「はあーい

がチャリと扉を開けても、誰もいない。

「ピンポンダッシュショカ？」

「ピンポンダッシュショカねえ！」

下を見下ろせば、そこにはぶかぶかのローブを着たちつさっこ女の子。服装の模様から察するに…。

「ナツメに何か用か？」

「其方、姉様を知つていつのですか？」

あー、うん。このぶつ飛んだ感じはあいつの知り合いだな。

「ユサギ…？」どうしてここに

ナツメがノロノロと奥から顔を出す。女の子（ナツメが言つにはユサギ）が嬉しそうに手をぶんぶんと振る。

「姉様」。ユサギ、ここまで来たんだお。すつゝいでそお？

「ナツメ…この人は？」

「ああ、私の妹のユサギ・イヌヒ・オーフアだ。」

ナツメがユサギに中に入つてくるように手招きをする。ユサギは靴を脱いで入つていく。一応、俺の部屋ですが？

「姉様。そろそろお家に戻つてくれさい！あたしだけじゃ、お家を維持し続けるのはもう無理ですぅおー！」

「そつは言つても…私はここが気に入つてる。だからここからは出ない。」

ユサギは、むう、と大きく頬を膨らまして手をバタバタと振つて叫ぶ。

「早くしないと、あの人、怒つちやうし、兄様だて維持出来ないんですぅう！！」

ナツメは観念したかのように深く溜息をつく。

「ああ、やつとこれで俺の自宅警備員生活がカムバックしてくる…。」

「そこまで言つのなら、お前が私をここから引っ張り出して連れて帰れ。」

「……はあ？」

俺は呆れたような、驚いたような声を出す。ここは俺の部屋だつて

えの。

「分かりました！！」

おい。俺を置いて話を進めるなし。

「私が姉様を無事、連れて帰ります！！」

あー。やっぱり、こうなっちゃうのね。

俺は一人の勝手な話に意識を遠くして、考えた。

きっと、俺の自宅警備員生活のサイクルが戻つてくるのはかなりの先だらうと。

対処7・タイムリミジットジャガwww

あれからユサギ含めての俺の生活が始まった。

あれから変わったことと言えば、ユサギとナツメが何処かへと出かけていく事が格段に増えた。

「俺としては嬉しい限りなんだけど…なあ。」

最近ナツメが居続けた影響からなのか、一人がとても静かに感じる。ただ、ゲームの音だけが部屋に流れ続けた。あ、レベルが上がった。

部屋の近くの公園の並木道をナツメとユサギは一人で歩く。正確には、ユサギがナツメの後を追いかけるといった感じだが。
「姉様ー。本当にお願いでうから、戻つてくらせいーーー！」
「嫌だといつたら嫌だ。お前もいい加減懲りろ。」「あねさまあ……。」

ユサギが頼りない声を出す。

「後三日したらくあの人ゝが贈り物するって言つてるけど、つ絶対怒つてますつて！！姉様も、あの人も滅茶苦茶にされちゃいますつて！」
ぴたり、とナツメの歩みが止まる。すかさず、ユサギが追い打ちをかけていく。

「それに！姉様の目的は果たせたのでしょうかー？ならば早くお戻り下さい！」

「ユサギ。」

ナツメの声には怒氣が含まれていた。

「姉様…。兄様がどうなつても、いいのですか！？」
ユサギの足音が遠ざかる。

「分かつてゐる。それでも、私は……ここに……」

“贈り物を”

「贈り物……」

ナツメの頬を冷たい風が通り抜ける。

何時までここにいられるかは、ナツメにも分からぬ。ただ、時間がくあの人>が許す限り……ここに居たいと、ナツメは思う。

がチャリ、とドアが開く音がした。きっと、ナツメとユサギが帰ってきたのかと思つて覗けば顔をムスッとさせたユサギ一人だつた。

「ナツメは？一緒にやないのか？」

「姉様なら一人で歩いてくるつて言いました！」

ユサギはベッドにダイブするとブツブツと一人で呟く。

「大体、姉様が居ないと兄様だつて維持することは難しいのにい……。姉様てば、ここで生活がく名残惜しい>のではないのでしうか……。でも早く帰還しないとくあの人>は特大の爆弾を落とすつもりでしょうしい……！」

「ナツメをどうしてもゲームの中に戻したいんだな。」

ユサギは驚いたように俺の方を見るが、今までの呴きを聞いていれば誰だつて分かる。どれだけナツメを心配しているかを。

「姉様が居なければ兄様だつて……」

「心配しているのか？その、お兄さんもナツメの事を」

「ええ……まあ」

ちらり、とユサギはカレンダーを見る。

皆様には言い忘れていたが、今は12月の29日。後2日で年が终わり、新たな年が始める。

「後2日以内に戻らなければ、盛大に怒られてしまうのですうう……！」

「怒られるつて、誰に?」

「ええと、それは……のまじめなと、ここから手を使わせてもらひます。」

ユサギは少し気が紛れたのか、帰ってきたときよりも「口」を笑顔を零すようになっていた。言葉遣いも戻ってきてしまったが。

「それに兄様だって……姉様が居なければ……」

「さつきから兄様兄様って言うけどさ、何か事情でもあるのか？」

兄様を出現させた方法はご存知ですか？」

「どんなん条件なんだ？」

ユサギは、にま、と笑うと

それは内緒れす！それに、時が満ちれば、分かりますよ。

息まで聞こえてきた。全く、子供らしいというか何というか。
さらり、とコサギの髪が俺の手に一房落ちる。その感触は正に人間
そのもの。とても、ゲームのキャラクターには見えない。

ごろり、と体勢が変わり顔が俺の方に向く。余りにも可愛らしいその寝顔に顔が綻ぶ。

一

「これが、デジャヴだといふ」と。」
「つつつ変態」

ああ、意識が飛んでいく5秒前。

俺の意識は5秒を待たずに飛んでいった。

対処8・短いしあわせ、解かれた矛盾。

『きっと、必要としてくれる人はいる。こんなに広い世界なり。』
いつの記憶で、誰の記憶なのか。それは分からない。
でも。

『だから、全てを投げ出すような事だけは…やめる。それを約束。』
何もかもを失つてでも、その記憶だけは残したいと思つた。
誰かと会話した誰かの記憶を。

「… わむ。」

朝の寒さにナツメはノロノロと瞳を開けた。見れば、集はゲームを
メニュー画面にしたまま微動だにしない。寝惚け眼で見れば。

「すう…すう。」

心地よい寝息をたてていた。ナツメは思わず微笑みを零す。
だが、そこで、はたと気付いた。自分にはやらなければならぬ事
があると。

「まあ、半分は諦めたのに……ね。」

自嘲するように、ふ、と微笑む。ナツメは毛布をベッドから引きず
り落とすと、起こさないようにそつとかける。

こつそりとゲーム画面のメニューを消すと、そこは何回か見たダン
ジョンだった。進んでいないのか、それともレベル上げのため来て
いるのかは集が眠つていて確認出来ないがその画面はナツメの
不安を増殖させた。

(もつ…。時間が…)

ウトウトと眠気がナツメにゆっくりと襲いかかる。

「ふあ…あ」

大きく欠伸をすると、もぞもぞとベッドに戻つた。

「姉様一。」

「嫌だと言つたら嫌だ。」

またいつものように、一人が口論・只の口喧嘩をしている。

「ナツメも一回は戻つてやれって。」

ナツメは暫しの間、二つを見ていたが

「……分かつた。」

やがて溜息をつくと、妥協したように立ち上がった。

「姉様……！！」

ユサギの表情は何故か悲しそうな顔だった。

（あんなにも連れて帰りたがっていたのに？）

「と、言うわけで。」

ナツメがくるり、二つを見る。

「短い間、世話になつたな。」

その顔は笑つていて、悲しげで。俺は思わず不安げになつた。

何か、二人ともが戻りたくないかのように見えて。

「そんな不安な顔するな。どうせ直ぐに戻れるさ。それまで、精々
私を思い出して一人で泣いていろ。」

「誰がそんな事するか。」

ナツメは口に手を当てて、くすくす、と

とても楽しそうな笑顔を見せた。

「姉様。では…戻りましようか。兄様の為にも」

ユサギがそう言つて、部屋の外に出る。

「ここから、帰るんじゃないのか？」

「一応、私にも感慨に浸りたい時間は必要なんだよ。
ん？」

ナツメはまた笑うとそのまま、部屋を出ていった。

部屋を出て、並木道を一人は歩く。

「姉様…。本当によかつたのですか？」

「何が？」

「あの人のこと…です。何も言わなかつたのでしょうか…。今ならまだ

「もういい。」

「姉様…！」

「もういいって…！！！」

ナツメが今までにない声で叫ぶ。その声に思わずユサギは体を強ばらせる。

「わたしはもう全て決めた。私一人で…終わらせる。」

決意したナツメを待っていたかのように体にノイズがはしり、

“お帰りなさい”

あの声が木靈する。

“全く、早々に決意してもらえて僕、嬉しいよ。”

「満足か？」この結果は、お前の思つ觀劇するに値するものだつた
か？こんな、こと

ナツメの声がどんどん小さくなつていぐ。

“んうーと。正直に言つちやうと、余り。むづむづとアクション
があるかなあとか思つてたのに…”

「残念だつたな。」期待に沿えなくて。

“だから…。”

キン、とナツメの頭に痛みがはしる。その痛みと共に、解れて溶けていく、誰かの大切な記憶が。

「あ……え、え？」

解れていくなかで揺れて、波のように頭を駆けていく。

“もうちょっと…ね？”

「やめて…！姉様に酷い事は、しないで…！」

ユサギが手を握り締めて、叫ぶ。

“酷い事？違うよ？元に戻すだけなんだ。捻じれてしまつた記憶を、ね？”

更に痛みは酷く、ナツメを苦しめる。

“いっつ、しようたいむー。にやは”

ぽん、と空に音が鳴る。

見上げれば、そこには

「花、火…？」

ユサギが呆然と呟く。

そこには綺麗な、観る者全ての目を惹きつけるような花火が上がっていた。冬に有るはずのない。それと、同時に。痛みは増して、遂に。

「あ、がつ……！？」

頭の記憶が一斉に弾けた。

時同じくして。

集もまた、頭の痛みを感じて。

耐え切れずに、そのまま意識を手放した。

集の記憶が

ナツメの記憶が

解けて、溶けて。

始まる。

対処8・短いしあわせ、解かれた矛盾（後書き）

次からはギャグといふか、明るさはなりを潜めます。

どうしても話の核に触れる部分になってしまつので…。

でも、読みやすく！わかりやすく！をモットーに頑張つていきたいです。

因みに、本編でナツメが二ートの事を「こう」と言つてるのは二
ートの事を本人が余り分かつていいからです。w

対処9 り・すたーと。

暗い、暗い海に体がゆっくりと落ちていく。
でも、そのスピードは恐ろしく遅い。
違う、これは記憶。記憶が体のようになり、落ちていく。
何処まで落ちていくのかは分からない。

終わりの無い。何時までも続くそれは、まるで続き終わらない
あのゲームのよう。

「……ん？」

集が目を開けると、何もないうつもの部屋。だが、集はそこに大きな違和感を感じていた。何かがぽつかりと抜け落ちてしまったかのようだ。

ただ、古い機種のゲームのBGMが聞こえる。

「あれ、こんな事してたか？」

電源を切ろうと手を伸ばして、止めた。

このゲームに何かがある。自分の抜け落ちてしまつた何かが。

「このゲームで、俺は何を…？」

「あー。やっぱり、でしたか。

いつの間にかベッドに座つっていた女の子は分かつているような微笑みで舌つ足らずな言葉で。

「お前は？」

「ああ…あたしの事も忘れてしまつて？姉様の記憶と一回解してしまつた影響なのかな？」

女の子はこて、と首を傾げると。

「私は、ユサギ。貴方の抜け落ちてしまつた何かを全て知つている。

」

集は思わず身を乗り出して、ユサギの肩を掴んだ。

少し、力が入つてぎりぎりと肩が締まる。

「…い、たつ。…痛いです。離してえ。」

「あ…、ごめん。」

ぱ、と直ぐ様手を離す。ユサギは「ヒヒヒ」と笑うとゲームのコントローラを取った。

「嘘ですか？ 大体、私はゲームでの存在ですから、痛み等感覚はありません。それよりも、私達の事と、貴方との関係をお話します。」

ユサギの顔が一変、何も感情を映さない瞳になる。それはまるで、ゲームに出てくるNPC。その様子に、集は只、信じるしかなかった。

やがて、ゆっくりと落ちる感覚が消えていく。

地、なのか分からぬ。そこはとての柔らかくて地に足を付けているといづれとも、浅めの沼に足を浸しているかのよづな…。

“お帰りなさい。待っていた、ずっと。”

ああ、この声に私は何故か安心する。忌み嫌っていた筈のその声を。全てを奪つて、私を閉じ込めた、この声に。

“君の願いは届かない。彼の記憶は全て解けてしまった。君の事も、短い間過ぎしたあの頃も、彼の中には一つも残つてはいない。”

そう、私は只、の人ともう一度会いたくてこの場所から抜け出した。

私はとても傲慢だったけれど、それで、の人を困らせたけれど、それでもあの人は笑つていて。

それだけで、もう良かつた。例え、全てを忘れてしまおうがあの人に

が笑顔でしてくれるのなら……満足。

“君は満足したのでしょ？なら、次は僕の番。さあ、ゲームの続
きをしよう。君が来るのを……、待つていろよ。”

キヤラじやない事を言ひ、って笑ってくれるのだろうな？きっと、
お前は。

自嘲するように笑つて、私は呟いた。

「ログインする。強制シャットダウンを選択コマンドから消去。」

もじ、もつ一度会えるのなら
きっと、私は出来るかな？

元の私で。

「 。 」

つて言えるといい。

さあ、ゲームを始める。もう、現実には戻れない

対処10・ゲームログイン

「で、貴方はここまで聞いて何か質問はありますか?」

「……えっと。」

ユサギが全てを話終えて、集は溜息混じりに声を出した。
それもそのはず。ユサギの口から零れ出てきたのは普通には有り得
ないような事ばかり。

(でも、信じられる話……でもある、のか?)

集はユサギの首をこてり、と傾げる様子に脱力して息抜きに、と口
一ヒーを持ってきた。二つのカップを持つて。

一つはコーヒー。そしてもう一つはココア。

「ほり。取り敢えず、これでも飲んだら?」ここに来てからずっと何
も食べてないしさ。」「

「…ふわあ…。」

ふわりと立ち上る湯気から香るココアの甘い香りにユサギは…ユサ
ギのお腹が、くう、と鳴る。

「飲んでいいよ。別に毒とか入っている訳でもないし。」

「……いいの、お?」

ユサギは暫しの間ココアをじっと見つめて、手に取ると

「…………ふはあ。」

一気に飲み干した。一応、温めの温度にしておいたため火傷する事
はなかった。

「おーいしかったのですうう!!」

「それは、どーも。」

「でも、いいのれすか?」ここまでしてもらひついで……

「いいよ、別に。色々な事を話してくれたお礼的な?まあ、気にし
ないでよ」

集は一口、コーヒーを嚥下するとユサギを見る。

「で、俺にして欲しい事は?」

「貴方の記憶を取り戻します。それが、貴方にとつても姉様にとつても大切な事だから。」

「その方法がゲームにある、と。」

「はい。ゲームの中のボスが全ての鍵を握っています。貴方も、彼女もくあの人人に絡まっている。」

ユサギはにつこりと笑うと、ココアの入っていたカップを両手で包み込む。

「私は、貴方になら姉様を……救つてもうえると思つています。」
そう言つて、何もないカップに口付ける。そこには、確かに新たな湯気が出ている。

「……え？」

「これが、神力キャラちじゆ の真體れす」

（それとこれは違うだろ）

集はその言葉を飲み込んだ。

「……それで、これから的事はわあかりましたか？」

「まあ、一応は。理解は余り出来てないけれど。」

取り敢えず、これから行動をユサギから聞いたが集はいまいち理解があよんでいない。

「……習うおり、慣れろです」

ユサギは思い切り集の腕を掴むと

「口おグインします。尚、新たな玩具ブレイヤをお持ちしましたあ。同時におグインします」

集に有無言わざずユサギは勝手にゲームログインを終えてしまった。

「これは、ログインとかの必要が無いゲームじゃないのか？」

「あい。でも、ゲームから出てきた私のようなキャラは戻る際にはログインという手順を踏めば戻る事は可能ですが」

「結構めんどくさいんだな」

「そう…でしゅね。でも、そうしてでも戻りたいんですよ。私達は

…どんな危険を背負つてでも。〈あの人〉の怒りを買おうとも

「……ふう、ん」

不意に見せたユサギのしつかりとした瞳に思わず、集は目を奪われる
「さて、と。そろそろログイン完了しちゃいますけど…いいんですね
か?私は全て話しました。これから行動が危険である事も、全て。
それでも、行きますか?」

集は苦笑して。

「そもそも、俺が行きたくないと分かつてたら、半ば強制的にログ
インはしないだろ?」

「あは バレてしましました?」

ユサギはにひ、と笑うと

「あ、そう言えば忘れてましたア?」

集の手の平に安っぽいペンダントを乗せた。それは、集の部屋の何
処かで埋まり、時間を無為に過ぎしていた物。

「これが?」

「それを、姉様に会つたときに渡してください。それから、全ては
記憶の修復は始まりますから。」

「…分かった。」

集はそれを壊さないよう、そつとポケットの中にしまった。

ユサギはその様子にまた、へにやり、と歳相応の笑顔を浮かべる。
「うんうん やっぱり私の目に狂いはある、無かつたようですね」

ログイン完了。体のデータ分析開始。同時にデータ移行を開始し
ます。

(……あれ?)

集は今聞いたインフォメーションの声に僅かな疑問を感じた。

そして、ユサギを見る。だが、ユサギは

「…さつきから、私の事見すぎですか?」

あ!? 私に気があるとか!/?うーむ。困るこちあ……

適当に誤魔化すように、顔を背けてしまった。

データ移行、終了します。

体にノイズが走る。それが合図だったのか、一人の体は完全に消えた。

対処10・ゲームログイン（後書き）

何か中途半端で終わってしまってすみません。
でも、この終は仕様なのでwww書き忘れたとかでないですよ？

対処11・ログイン終了かーらーのー?

「…わふつ

ゲームにログインして、体がノイズ化してすぐ、集は何か柔らかい物の上に落ちた。

続けて、コサギも落ちてきた。コサギは慣れているだりつと、集は思っていたが

「ひにゃあー!」

集と同じくすっとんきょんな声で落ちてきた。だが、集とは違つて場所の把握が直ぐに出来たらしく周りを見回すと、ぽんぽんとスラートを叩くと

「こには、ゲームの中盤にある村…確か…。」

集は今だぐわんぐわんとする頭を押さえながら

「オートリアス、の事か?」

「あああーーそこまで一気に来んだよ。」

立ち上がり、周りを見渡せば、見るからにものどかな村の景色。まるでゲームの中に居る事を忘れてしまってやうなほどリアルに、暖かく出来ている。

「さて、ここからはどうするんだ?」

「貴方のゲームの進み具合からして、姉様はここに必ず立ち寄りますよ。」

「その…ナツメ、だけか? そいつは自分の意思で動けるんだろ? だつたらもう先に行つてしまつているんじや?」

「それは無いですよ。あくまでも、姉様の行動はセーブポイントと、ゲームの…しなりお?… それの範囲内でしか動けないんで。」「えつと、つまり?」

「セーブポイントがある場所と、ゲームの進行で訪れる場所には必ず訪れる事がプレイヤーの原則ですから」

ある程度歩いていくと、宿屋の前に煌々と光る蒼色の球体があった。

「あれが、セーブポイント。だから、ここに姉様は訪れます！前にセーブを見た限りでも、こここの少し前のダンジョンからでしたからあ」

『あら、そこのお一人さん！』

二人が振り向くと、そこには恰幅の良いおばさん。

『ねえねえ、あんたたちは旅人かい？』

本当は違うのだが、集とユサギは一度おばさんに背を向けると（どうする？）

（この際、旅人だと言つてしまつた方があこれから的事も都合がいいのですお。）

「はい。」

ユサギが、につこり、と演技っぽい笑顔を振りまく。

『あ、あんた…もしかしてユサギ様かい！？』

「はい。どうですか、あれ以降のここは？」

『はい。おかげさまで…。それよりも、こっちの人は？』

「ああ。私の大切な人を救うために…。私の巫女です。」

『巫女様だったのですか！？いやはや、すみません。』

「いいえ。まだ新米ですのでそう思われても、無理はありません。チート

：それと、敬語はなし、でお願い出来ますか？私は確かに“神力”

の力の加護を受けていますが、それを除けば私もただの人ですから。

』

ユサギはふわりと笑う。

（おお。すごい演技力）

集はその間、ユサギの演技に関心していた。

「良かつたですね 確保が出来て。」

「まあ、な」

その日の夜。ユサギにお礼がしたい、と宿屋の店主だったおばさんが言つとユサギは

「でしたら、一日だけでいいのですが…宿に泊めてもうえませんか？生憎と今持ち合わせがありませんが…」

そう言つてうつすらと涙を浮かべたユサギに、おばさんノックアウ

ト

そうして、今、タダで宿屋で休ませてもらつてている所だ。

「やつぱり、ゲームの進行を蔑ろにしなくて良かつたあ？」

「お前もやつぱりゲームのプレイヤーなのか？」

「え？ どうして、ですか？」

ユサギの肩が、びくり、と跳ねる。

「だつて、他の人のように決まりきつた会話をするでもなし…普通に冗談も言つていいし。」

「……あー。えっと。私は、姉様の補佐なので普通の人よりも感情豊かになるように設定されているのですよ…」

「一応、ゲームキャラだと？」

「あい。可笑しいですかー？」

ユサギは、びしつ、と手を上げる。

集はそれ以上突っ込んで上手くはぐらかされる気がしたので、聞く事をやめてベッドに潜り込んだ。

ゲームの筈なのにリアルなベッドの柔らかい感触に、微かに香る柔軟剤のような香りに張っていた気が緩み、うとうと、と睡魔が襲いかかる。

それから完全に眠りに落ちるのに時間はかからなかつた。

「……ふう。バレなくてよかつた」

一人、暗闇の中でユサギが、ぽつり、と呟く。それを聞いているのは光を放つ月のみ。

「私は…うん、いいの。これで…。この道を、選んだから引き返せない。」

暗闇の中に浮かぶ表情は誰にも見えない。月すらも、その様子を伺

い知る事は出来ない。

「……『めぐ。にこ……さん』

「おはおおーー」

次の日の朝。

ユサギはダイナミックに集の眠るベッドに飛びついた。案の定、集

から

「ぐえつ」

押しつぶされたような声が聞こえる。

「お、起きた？ 朝だよ？ 今日は姉様と会わなくちゃいけないんだよ！ ？ 今日しか会えるチャンスは無いのあ～。」

「分かったか、ら……取り敢えず、どいて」

「ほい。んしょ……と」

集は起き上がる。乗られた衝撃が効いているのか、肩やらなんやらが痛い。

「んで、何処にいけば……」

ガチャ、とドアが外側から開く。そこにはしつかりとした意思の宿る瞳。それは人とは明らかに違っていた。

「……姉様……？」

その場の空気が凍りついた。

対処11・ログイン終了かーらーのー?（後書き）

タイトルに深い意味はありません（；；^）
勢いで付けてみた。

対処12・ゲームの深淵へ！？

「姉様……？」

ユサギは恐る恐る名前を言ひ。

「……ユサギ。」

かつ、とヒールの音と共に近寄つてくる。名前の事を指摘しない辺りはその少女はナツメで間違いなかつた。

「姉様……一体どうしたんですか……」

——ひゅ——

ひやり、と集の喉元に冷たい物が宛てがわれる。それを集は見ずに何かを把握した。

(剣……………?)

ユサギが思わずナツメに飛びつく。

「姉様！？やめて！！」

「……」いつは、誰だ。

集を見下ろす冷たく、冷えきつた瞳に集の背筋に冷や汗が伝う。ユサギの必死な様子に、ナツメは今だ冷えきつた瞳を集に向かながら。「姉様！！剣を降ろしてくださいー！」

「……分かった。」

——ひゅ、ん——

ナツメは剣をひと振りして、腰に付けた鞘に戻す。

ユサギは集に手を貸す。集はユサギの手を借りて立ち上がる。

「こいつは、誰だ。」

「この人は……集。……姉様？」

「お前。」

「俺の事か？」

「お前の名前は集といつのか？」

「あ、うん……」

ナツメはそれを聞いた途端。

「…………ふわ。…………」

柔らかい微笑みを浮かべた。その微笑みに集も思わず気が緩んでしまつ。

「姉様……？」

「あ、え……。びづした、ユサギ。」

「今、とても優しい笑顔をしていましたから」

ユサギの指摘にナツメの頬が見る見るうちに赤くなつていいく。

その様子を微笑ましく見ていた集。やがて、ナツメは、わざとらしく

「こほん。」

と咳払いをすると集を見る。それは先までの冷たさは籠つておらず、寧ろ何か懐かしさが籠つっていた。

「何だろうか。お前を見ていると何か懐かしく感じるな。今日会つた気がしない……集という名前も、何処かで……」

「なら、姉様は何故さつき剣を向けたんですか？」

「あれは……何か違和感というか……この世界とは違う者という感じがして、排除しなければいけないと思つていたんだ。それで、気付いたら……すまなかつた」

ナツメが少し頭を下げる。

（あくまで、少しなんだな……）

「いや。気にしなくていいや。急にこつちに来た俺も悪いんだから。

ナツメがゆつくつと顔を上げた時。

「…………ああああ……！」

外から聞こえてきたのは、誰かの叫び声。ナツメとコサギは直ぐ様宿屋を飛び出す。集も続けて宿屋を出る。

「……うつ

思わずむせ返つてしまふ程の血の臭い。雲一つ無い青空の広がる朝には相応しくない臭いだった。

「こっちから、か」

その臭いは風にのっているようだ、その元は村近くの森からだつた。三人はそっちの方へ歩いていく。次第に血の臭いは濃くなり、森に入つてすぐ血の跡も見つかり、三人の警戒は更に強まる。やがて、広い場所に出る。そこが一番強く血の臭いがした。

少し進むと、聞こえてくる音。

ぐちゅ……がり、じつじつ……ぼと

「……あ。」

こっちに向かつて投げられたのは、骨。それは、人の腕程の長さでべつたりと血と何か透明な液が付いている。かなりの質量のあるそれは腕のようなもの以外にも広場に散らばつている。

足。腕。……そして。

「集。」

ナツメの声が集の意識を戻す。思わず凝視していたそれを隠すように、ナツメが立ち位置を直す。コサギは素早く周りを見渡して、元凶を見つける。それは禍々しい漆黒と紅の混ざつた色で、容姿は只の女人の人。だが、手や足にはべつたりと血の跡。

「……誰。」

『「んにちは。そっちの彼は、はじめまして。二人は久しぶり。』

流暢な言葉遣い。その声はナツメのようで、コサギのようだ。

「お前を私は知らない。」

すらり、と剣を抜いて構える。

『あり？私は何回も会っているのだけれど……。くすくす。』

「答える。お前は誰だ。」

その女性はうつすらと目を細めて、笑った。

『私は……。アサギ。』

対処13・デフォの戦い、結構過激な件について。

「アサギ……？お前が、だと」

『はい。それについては、間違いありません。』

『アサギ、だという事は事実ですから。』

重なる女性の声。周りを見渡せば、既に何人もの同じ女性が立ち同じ言葉を発している。

『私達は彼女から生まれた分身。』

『彼女の意思是私達の意思。』

『アサギは、もしかして……。』

ユサギがぱつり、と呟く。

『貴方の推測する通りです。清らかなる道標。』

『でも、それを言う事は許さない。』

『彼女の意思を行動に。』

『意思を行動に。』

ゆっくりとアサギ達が、三人に向かって歩を進めていく。
同じ言葉を口々にしながら。

『誰に目的が。私が？』

『それとも、私ですか？』

構えをそのままに、二人は目配せをし、警戒を強める。

『いいえ。違う。』

『私の意思は、違う。』

『貴方に用があるの。一緒に来て。』

す、とアサギ達が同じ人物を指す。その先には、ユサギとナツメ、
その二人に守られるようにいた集。

『あ……俺……？』

『貴方に、用があるの。貴方だけに。』

『それ以外はいらない。必要ない。』

『集に何の用がある。』

「大体、集さんはついさっきゲームにログインしてきたばかりなのに……どうして、〈あの人〉が知っているの！？」

『いいの。それは貴方達が知る必要は無いから。』

『貴方達はもう、おしまい。ここまで、この人を連れてきてくれて、ありがとうございます。と言つておくわ。』

少しずつアサギ達の言葉に間が生まれる。だが、歩は相変わらずのスピードで。

『ここから、は、私達が…連れていぐ。貴方、達…終わりに、な
る』

「ユサギ、準備…！」

「はい…！」

そう言つと、ユサギは集の足元に陣を形成した。その陣は青々と光、はらはら、と桜とも何とも判別出来ない花弁が舞い落ちる。その似つかわしくない花弁の景色に、アサギ達は一瞬ながら氣をとられる。その一瞬をユサギは、ナツメは見逃さなかつた。

「オウガサミダレ花弁月下”…！」

「つわあ…！」

舞い散つていた花弁が一斉に集の周りを取り囲み、小さなフィールドを形成して、そして消えた。

『隠した…。その人、渡して。』

『何處に、隠した。教えて…。私、た、が…怒る、前…に。』

『怒る前に。と言つ前にもう怒つてますよね？』

ユサギが、くすくす、と笑い、手に鎌の付いた背丈以上の鎌を持つ。

『それに、私達が簡単に教える訳がない。分かつているだろ？…ナツメが刀を軽く振り、挑戦的な笑みを浮かべる。

『私達、怒つた…もう、いい…。全て、壊、す。』

『…、わして…奪う…！』

アサギ達が同時に陣を発生させる。そして、同時に走り出す。

『「そうでなくっちゃ。」』

二人の周りに、風が巻き起つる。

「……、は……？」

集は周りを見渡す。周りは暗闇で、ただ、陣を形成した時に舞つて
いた花弁がはらはら、と光を伴つて空に踊つている。

「あの、花弁の中、なのか……？」

“はじめまして。上南君^{カミナヤ}・集君^{シユウ}、と言つた方がいいのかな？”

暗闇に響く、幼い男の子のような女の子のような声。その声はまる
で新しい玩具を見つけたような、喜びに満ちた声。

“あの子達^{アサギ}にはあの一人の相手をしてもらおつか。僕は君と話した
いんだ。”

「俺はお前の事は知らないし、顔も見せないような相手とは話した
くない。」

“……そういう所は相変わらず、だね。まあ、いいや。”

ぼう、と暗闇に灯る小さな光り。

“顔を見せたいんだけど……、生憎と僕達^{ハタク}には顔が無いんだ。そ
もそもの固有名詞も無いんだけれどもね。だから……”

ぼう、と灯つっていた光りに輪郭が現れる。そして

“これで、いいかな?“ごめんね……。でも、感情は表すこととは可能だ
から”

ゆらゆら、と揺れる光り。微かにその中には何かしらの感情も混ざつている…のだろう。

“さあ、話そうか？何からお話ししようか？”

『……ん、ぐあ！』

『い、たい…。また、死んだ…。5人…私、死んだ。』

『許さ、ない…！私、怒る…。』

ひゅん、と鎌をひと振り。ユサギはそれでも、笑みを絶やさない。「はーふう。疲れったあ…。」

ひゅん、と刀をひと振り。ナツメはそれでも、笑みを絶やさない。「ふ、この程度で疲れるのか？彼方の方に長く滞在しそぎたか？」
「姉様こそ、彼方に居すぎたせいで口調がヒロインじゃなくなつてますよお？」

「…そんなに言える気力があるのなら、まだ、いけるよな？」

「あつたりまえです！！！」

『…あは、ははは。』

『…あはは、はは。』

『…あははは、は。』

アサギたちが次々に笑う。妖艶に、不気味に。

「なんだ…？」

「分からぬないです…。でも、何か危険な感じがします。」

「用心するに越したことはないか…。」

ふおん、と二人の下に陣が形成される。そして、二人に絡み付くよう鎌が腕に、足に。

『あ、はははははは…。』

『あはは。分かった、伝わった。』

『彼女の意思、伝わった。』

アサギ達の狂つたような笑いが、森中に木霊する。
響きわたる声に、二人は背筋に冷や汗が伝わるのを感じた。

対処13・デフォの戦い、結構過激な件について。（後書き）

最初のタイトルに「デフォ」と付いているのは、ゲーム画面で見たら、全てのキャラがデフォされた状態だからです。ｗｗ
だから、本編で頑張って戦闘してもゲーム画面ではちっこいのがわらわら戦っているようにしか見えない。ｗｗ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5849y/>

RPGヒロインという名のチート野郎。

2011年12月5日19時04分発行